# 過去2年間において、当院での クレチン症外来受診の実態

日本大学医学部　小児科　北　川　照　男
松　浦　幹　夫

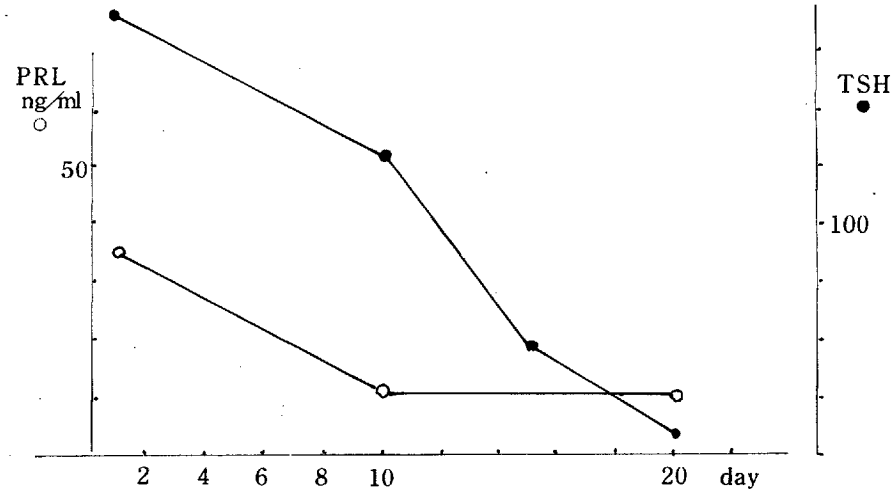
我々はマススクリーニング開始前における先天性甲状腺機能低下症の患児の、外来受診状態をまとめてみた。最近2年間において、甲状性甲状腺による先天性甲状腺機能低下症4例を経験した。内訳は女性3例、男性1例であり、外来受診時の年令は4才より8才までの間にある。全例に共通していた主訴は低身長であるが、その他の症状としては皮フの乾燥、不活発、腹部膨満などが主なものであった。検査所見においては $T_4$ 低値、TSH高値が共通していた（表－1）。

また同時に、プロラクチン（PRL）値の上昇が認められた。視床下部・下垂体における甲状腺系の活動性の増大に刺激される。あるいは内因性TRHの過分泌によるものと考えられるが、図に示すように甲状腺ホルモンによる治療開始後、TSHより速く正常に復帰するという傾向をもっている。

近年のクレチン症のスクリーニングによると、クレチン症の頻度は欧米で1／3000～1／6000と考えられており、当院の外来の状況は一般的なものと思われる。

Patients during 2 yrs
ectopic thyroid　4

| | U. S | K. H | M. O | S. O |
|---|---|---|---|---|
| sex | female(F) | F | male(M) | F |
| age on admission | 4 yr | 8 yr | 4 yr 9M | 4 yr |
| symptom & sign | | | | |
| lethargy | + | + | − | + |
| constipation | + | ± | + | + |
| feeding problem | − | − | + | − |
| dry skin | + | + | + | + |
| thick tongue | − | + | ± | ± |
| umbilical hernia | − | − | − | − |
| prolonged jaundice | − | − | − | − |
| abdominal distention | + | + | ± | + |
| hypoactivity | + | + | + | + |
| hypothermia | ± | + | ± | + |
| IQ | | 110 | 100 | 94 |
| BA | 1 yr 6M | 2 yr | 1 yr | 6M |
| BMR | | −13% | | |
| chplesterol | 202 | 250 | 220 | 313 |
| Al−P(KAU) | 16.1 | 16 | 14.3 | 15.7 |
| CPK(IU) | 68 | | 78 | 82 |
| $T_3$−RSU(%) | 20.3 | 18 | 28.1 | 20 |
| $T_4$ | 2.6 | 2.2 | 4.7 | 0.9 |
| $^{131}$I−uptake | 14.5 | 11.8 | 32.8 | 12.5 |
| TSH | 300 | 250 | 197 | 320 |
| prolactin | 32.0 | 24.0 | 34.0 | 340 |




# クレチン症のマス・スクリーニング

熊大小児科　松田一郎
化血研　橋本茂紘
林田寿幸
梅橋豊蔵

＜はじめに＞　私達は固相法TSH・RIAにてクレチン症のスクリーニングを行ってきたが今般これを基として大分、佐賀、沖縄県を除く九州全域を対象地区としてスクリーニングを開始した。固相法TSH・RIAの基礎的検討の成績とあわせてこれまでのスクリーニングの状況を報告する。

＜基礎的検討＞　今回私達が用いた固相法TSH・RIAは従来のSephadex-anti TSH Complex溶液作製時の洗滌操作が省略され、Tween 20液そのもので溶解したものを使用する。従って多検体処理の場合はかなりの時間的余裕がとれるようになった。濾紙血溶出時間、操作の検討では4時間かつ水平振盪時間2時間で低濃度でのTSHスタンダードカーブの立ちあがりが著明であった。洗滌回数は3回、4回とも変化なく3回で充分である。濾紙血の直径差での検討では3㎜×2枚と4㎜×1枚では差違はみられなかった。ヘパリン加濾紙血とEDTA－2Na加濾紙血との比較では両者間には問題は認められず、ヘパリン加濾紙血でもよいことがわかった。以上の成績より再現性を検討したが満足すべき値をえた。

次にマス・スクリーニングの成績では昭和55年2月28日現在までに45,081人の新生児についてスクリーニングを行い5名陽性者を発見した。これは新生児8,400人に1人の割合の発見である。私達がfollowしている1名は臨床症状は生後13日にて、ほとんど認められないが大腿骨々核は全く形成されていなかった。また血中$T_3$は170 nγ/dlと正常であるが$T_4$は

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

我々はマススクリーニング開始前における先天性甲状腺機能低下症の患児の、外来受診状態をまとめてみた。最近 2 年間において、甲状性甲状腺による先天性甲状腺機能低下症 4 例を経験した。内訳は女性 3 例、男性 1 例であり、外来受診時の年令は 4 才より 8 才までの間にある。全例に共通していた主訴は低身長であるが、その他の症状としては皮フの乾燥、不活発、腹部膨満などが主なものであった。検査所見においては T4 低値・TSH 高値が共通していた(表一 1)。